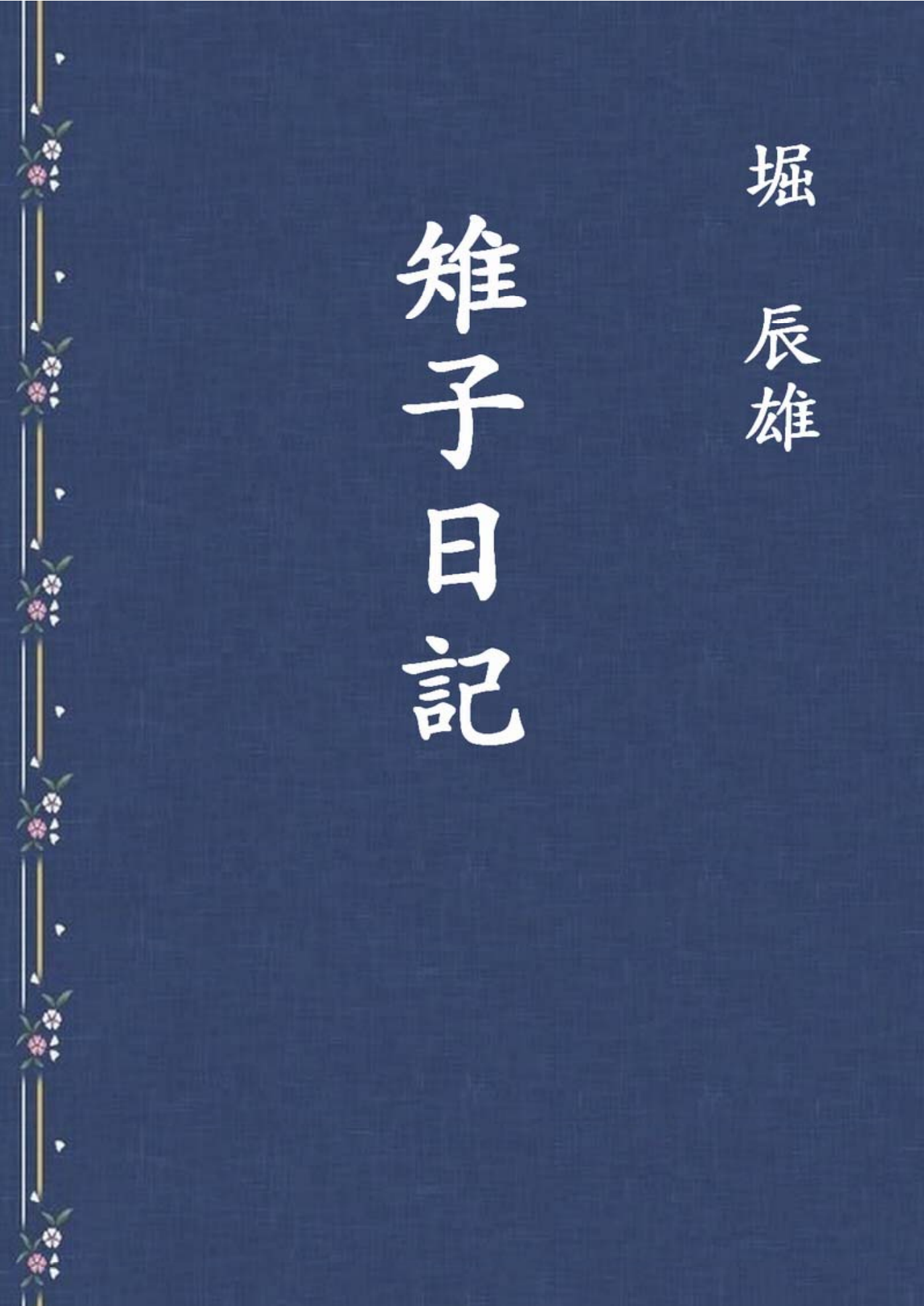


堀  
辰雄

雉子日記





雉  
子  
日  
記



## 雉子日記

### 一

去年の暮にすこし本なんぞを買込みに二三日上京したが、すぐ元日にこちらに引っ返して来た。汽車がひどく混んで、私はスキイの連中や、犬なんぞと一しよに貨物

車に乗せられてきたが、嫌いなステイムの通っていないだけでも、少し寒くはあったが、この方がよっぽど気持ちが良いと思った。

すっかり雪に埋もれた軽井沢に着いた時分には、もう日もとつぷりと暮れて、山寄りの町の方には灯ほかげも乏しく、いかにも寥さびしい。そんななかに、ずっと東側の山ぶところに、一軒だけ、あかりのきらきらしている建物が見える。あいつだな、と思わず私は独り合点をして、それをなつかしそうに眺めやった。

ハウス・ゾンネンシャインと云う、いかめしい名の、

独逸<sup>ドイッ</sup>人の経営しているパンションが、近頃釜<sup>かま</sup>の沢<sup>さわ</sup>の方に出来て、そこは冬でも開いていると云うことを、夏のうちから耳にしていたが、私がそれを見たのはついこの間のこと、——クリスマスを前に、二三日続いて、ひどい大雪があった。そう、このへんでも五〇糶<sup>センチ</sup>ぐらいは積った。そんな大雪がからりと晴れあがるや否や、鬱陶<sup>うっとう</sup>しく閉じこめられていた追分<sup>おいわけ</sup>の宿から、私はたまらなくなつて飛び出して、膝<sup>ひざ</sup>まで入ってしまうような雪の中を、停車場まで歩いて、それから汽車に乗って、軽井沢に來たが、ここでも軽便を待つのがもどかしく、勝手知つた

道なので、近道をしようとして野原を突切ったのはいいが、茅かやなんかの埋まっているところは体が半分ぐらい雪の中に入りそうになったり、いきなり道傍みちばたから雉子きじが飛び立ったりして、何度も立往生せざるを得なかった。やっと別荘のちらほらとある釜の沢の方に出たら、道もよくなり、いましがた通ったらしい自動車の轍わだちさえ生まましくついている。どこかの別荘に来た奴のだなと思いながら、その轍たどを辿っていったら、やがて山にかかるよ、それが消え失せ、その代りに男女の足跡らしいのが入り乱れてついているので、更にそれを追って行くと、釘くぎ



づけになった数軒の別荘の間から、私の前に突然、緑と赤とに塗られた雛型ひながたのように美しい三階建のシヤレエが見え出した。南おもては一面の硝子張りだが、それがおりからの日光を一ぱいに浴びながら内部の暖気のためにぼうつと曇り、その中から青々とした棕櫚しゅろの鉢植をさえ覗のぞかせている。——近づいて標札を見ると、「Haus Sonnenschein」とある。ふん、こいつだなと思って、私はその家の前を何度も振り返りながら、素通りして、裏の山へ抜けようとしかけたが、頭上の大きな樅もみの木からときおりどつと音を立てて雪が崩れ落ちくずてくるのに目が

開けられないほどなので、また、引っ返してきた。その時ふいに、クリスマスに來たいと言つてきた阿比留信にこんなところに泊まらせてやったら愉快がるだろうと氣まぐれに思い立つて、そのままずかずかと裏木戸から這入<sup>い</sup>つて、台所を覗いて見ると、ストオヴの側で白いエプロンをかけた日本人の若い娘が卓の上に水仙の花を惜しげもなく一ぱい散らかして、いくつかの花<sup>か</sup>瓶<sup>びん</sup>にそれを活<sup>い</sup>けていたが、私の意を伝えると、きのう主人夫婦も横浜から來たばかりで、何でも、もうクリスマスには大ぜいな客があるように申しておりましたけれども、……まあ、

中へおはいりになつてお待ち下さい、と人懐なつこそうに私の方をまじまじと見ながら、そう言い置いて、奥へ引つ込んでいった。私はもうそんなことはどうだつていいんだと云つたような、ぼうつとするような気持で、好い匂いのするストオヴに頬を赤くしながら、真白いエナメル塗りの台所の一隅に片寄せられてある、男と女の長靴から、さかんに湯気が立ちのぼっているのを見入つていた。……

## 二

いま、私の暮している追分ときた日には、村中であきな商  
いをしてるのは、村はずれの居酒屋みたいなのと、煙  
草や駄菓子なんか売っているのと、たった二軒。——正  
月こっちへ来てから、無精を極め込んで、一度も髭ひげをあ  
たらずにいたが、ある日、ぶらりと軽井沢まで汽車に乗  
って理髪店に行った。軽井沢の町だって、いまは大抵たいていの  
店はどこかへ店ごとそっくり荷送されでもしそうな具合

に、すっかり四方から荷箱同様の板を釘づけにされてい  
る。唯二三軒、うす汚ない雑貨店みたいのが、いまでも  
店を開いているが、そんな店先にもクレエヴンやペル・  
メルの罐かんが店たなざらしになっているのは、さすがに軽井沢  
らしい。郵便局の横町にある理髪店に飛び込んで髭をあ  
たって貰う。南を向いた店先には一ぱい日がさし込んで  
いる上に、ストオヴを自棄やけに焚くいでいるので、苦しいく  
らい熱い。この店は夏場は五つか六つ鏡が並べてあつた  
はずだが、いまはたった二個、——そうして他の鏡のあ  
つた場所は、どこかの別荘のお古らしい、バネの弛ゆるんで

いそうなベッドが占領している。ここでこの親方は、客の来ない時は昼寝でもしているのだらう。——私の向っている凸凹のある鏡には、筋向うの、やっぱり釘づけにされた、そして横文字の看板だけをその上にさらし出し、ている、肉屋と、支那人の洋服屋が映っている。おや、何だか見覚えのある奴が通るぞ。なあんだ、テニス・コオトの番人か。やあ、こんどは自動車が通る。毛唐の奴らが鮎すしづめになっていやあがる。ふふん、さてはハウス・ゾンネンシャインの連中だな。鏡の中に映らないが、自動車が何か引きずってゆく音がする、何だい？ と訊き

いたら、櫛そりですよ、と親方は無雑作に答える。

それからいそいで理髪店を飛び出すと、きつとゴルフ場へでも行って櫛で遊ぶのだろうと思って、そっちへ行って見ようと、まだ雪のだいぶ残っている町の裏側の「水車の道」へは行って聖パウロ・カトリック教会の前まで行きかけたけれど、道は悪し、なんだか面倒くさくなつて、その筋向うの裏口からホテルに飛び込んで、お茶を飲まして貰う。もちろん、客なんか一人もない。そこで軽便の出るまで、ホテルの娘と無駄口をききながら、ストオブに噛かじじりついていた。

追分の宿に帰ったら、思いがけず田部重治たなべさんが来ていられた。越後えちごの湯沢とかへ兼常かねつねさんやなんかとスキイに行かれたお帰りだとか。皆と高崎で別れて、お一人だけわざわざこちらに寄られた由。——茶の間の大火燧こたつの上で、鳥鍋をつつきながら、誠ちゃん（宿の主人）も加わってよもやまの話。——田部さんは本当に追分が大好きらしい。ことにこんな風に一杯聞こし召されようものなら、誰に向つても、追分のいいことを繰返し繰返し語られる。僕なんぞはもういい加減耳に聾たこ胝が出来てもよさそうなはずだが、一向聞き倦あきもせず、にこにこし



ながら会榎あいづちを打っているのだから、これも不思議だ。

たかが浅間山の麓で、いくぶん徳川時代の古駅のおもかげ 倂

をそのまま止めているというよりほかに何の変哲もない、こんな寥さびしい村が、一体何でそんなにいいのだろうか？

と他の人が聞いていたら、思うかも知れない。

この間、辻村伊助の「スウイス日記」を読んでいたら、リルケがその晩年を送りながら「ドウイノ悲歌」を書いたシャトオ・ド・ミュゾオのある、ロオヌ河のほとりの、ラロンという村なんぞは、汽車で素通りしている。ああいう旅行者にとっては、取るに足りないような寒村が、

かえって詩人にとっては仕事をよく実らせてくれるのかも知れないのである。

## 三

浅間山だけがすっかり雪雲におおわれ、その奥で一人で荒れているらしく、この山麓の村なんぞには、日が明るく射しながら、ちらちらと絶えず雪の舞っているようなことがある。そんな時なんぞ、どうかして不意にその雲の端が村の上にかかると、南に連った山々のあたりには

くつきりと青空が見えながら、村全体が翳<sup>かげ</sup>って、ひとしきり吹雪<sup>ふぶ</sup>く。と思うと、すぐまた、ぱあと日があたってくる。ここでは、そんなような空合いの日がかなり多い。

田部さんがリュックを背負って帰って行かれた七日の夕方も、そんな雪<sup>ゆき</sup>催<sup>もよ</sup>いだった。途中の落葉松林のはずれまでお見送りして、そこから一人で帰ってきながら、私はこの村にこうして一人で気<sup>き</sup>儘<sup>まま</sup>にいられるのを幸福に思わなければならぬのかな、と考えたが、それにはいささか、半信半疑だった。

それから二三日立ってから、去年の夏この村で知合に

なつた英夫君が、正月になつたら送つてくれと云つて頼んで置いた空気銃を東京からわざわざ持つて来てくれた。

翌日、一日じゆう二人で空気銃をもつて森の中を駈歩いた。森の中はまだ雪が相当深い。これは狐の、これは兎の、それからこれは雉子か山鳥かどつちかだ、と雪の上印せられている色んな足跡を、この間教えられたばかりのをおぼつかなく思い出しながら、そんなことを言ひ合っている間にいきなり私たちの行手から飛び立つ鳥どもの羽音に、空気銃を手にしていることなんぞちよつ

と思ひ出せないくらいに、びっくりしたりしている、即製（即製）の獵人たちの間抜けさ加減！ 一日じゅうの獲物といつたら、たった（ほおじろ）頬白が一羽。……

その翌日、英夫君は二時の汽車で帰るというので、昼飯を早目にすませてから、お別れに村の西のはずれの、（わかされ）分去のところまでぶらっと散歩に行った。馬頭観音やなんかはまだ雪の中にしよんぼりとしている。二人でその傍に佇んで、しばらく浅間山の方を眺めていると不意に思ひがけなく私たちの頭上を、一羽の青味を帯びた大きな鳥が翼を水平に拡げたまま、すうと低目に飛び過ぎ

た。やあ、雉子だ、雉子だ、と私たちが言い合う暇もないうちに、街道の向うの小さな松林の中に、突然よろめくようになって、その雉子は下りて行った。いそいで私たちもその林の中へ躍り込んで見ると、もう飛ぶ力になくなって、いるらしいその雉子は、難なく英夫君の手で生いけ捕りにされた。

どこも怪我はしていないようだが、大方鉄砲打ちに翼でもやられて、やっところまで山の中から逃げて来たのかも知れない。雄だから、綺麗な尻尾しっぽをしていた。空気銃でも持ってきていたら、それで射とめたのだと宿に持

ち帰って威張れようが、あいにく手ぶらなので、へんな  
かっこう恰好で、そのままそれをぶらさげて帰った。

英夫君に東京へお土産みやげにしたまえと勧めたが、帰るの  
 はもう一日延ばして、こっちでそれを皆と一緒に食べて  
 行きたいと云って聞かなかった。

雉子はまだ辛からうじて生きている。それを不自然な殺し  
 方はしたくないので、宿の老犬ジャックを連れて、裏の  
 林へ行つて、その雉子を放したら、昔猟犬だったジャッ  
 クはその逃げようとする雉子を巧たくみに追い廻しながら、  
 要領よく噛かみ殺し、羽だらけになった口に銜くわえたまま、

それを私たちのところへ持って来てくれた。

雉子は悪食あくじきだから、肉が臭いと聞いていたが、鍋にしてもそれほどいやな臭いはしなかった。が、なんだかすこし無気味で、あんまりうまいとも思わなかった。



## 続雉子日記

英夫君が帰京してから、こんどは私は一人で毎日のように空気銃を手にして、ジャックを連れては、ほとんど二三日おきぐらいに降るのでますます雪の深くなった森の中を愉快そうに歩きまわっていたが、少しその度が過ぎたと見え、とうとう十日ほど前から風邪かぜを引いて、い

くじなく寝込んでいたらくである。枕もとにはお義理のように横文字の本を堆高うずたかく積んであるが、見ているのは大抵例の「スウイス日記」か、ベデカアのスウイス案内書ぐらいなものである。

この前の日記に、私はリルケが晩年住まっていたシャトオ・ド・ミュゾオのある村をラロンと書いて済すましていたが、実はラロンはリルケの墓のある村の名で、同じヴァレエ州の同じロオヌの川沿いながら、ミュゾオのあるのはそれより少し下流に位している、シエルという小さな町から更に上方へ入った、葡萄畑なんぞの真ん中ら

しい。そしてそのミュゾオもシャトオとはほんの名ばかり、むしろ十三世紀頃に出来た小さな塔のようなものであるらしい。

一九二一年の秋のことである。それまでスウイス中を転々としながら、長い間中絶されている「ドウイノ悲歌」を再び続けるべく、そのために外界と遮絶しやぜつして、全く一人きりになっていられたような隠れ場所を捜しあぐねていたリルケは、遂に伊太利イタリヤとの国境にもはや近いヴァレエ州にやって来て、そのどこかプロヴァンスや、また西班牙スペインのある物をさえ思わせるような一帯の風物を一目

見るや、こここそ自分の求めている場所と信じて、その町の一つのシエルにしばらく滞在し、附近を捜しまわったがそれも空しく、とうとうその町をも立ち去ろうとする間際になって、偶然ある飾窓に売物に出ている一つの塔の写真を認めた。それは彼のある友人の寝台の上の壁に以前から掛っていた絵の中の古い館やかただった。そしてそれがミュゾオだったのである。それを彼はその同じ友人の世話によってようやく手に入れることが出来た。

\*

「恐ろしい山々の荒漠こうばくたる風物の中に全く孤立せる小さな館。……私はこれまでかかる孤独な存在、かかる沈黙との極度の親密を想像だに出来なかつた。親愛なるリルケよ、あなたは純粹時間の中に閉じ籠こもっているように私に思えた……」と、その頃そこを訪れたポオル・ヴァレリイは書いている。

翌年の二月である。十年前の、一九一二年ドウイノにて着手せられ、一九一四年以来ほとんど全く中絶していた「ドウイノ悲歌」は遂にそのシャトオ・ド・ミュゾオ

において完成せられた。しかもそれは僅か<sup>わず</sup>二三日で出来上ったのである。

それを書き上げた夜半、リルケはもうペンを握る力もないくらいに疲労しながら、眠る前にその出版者キツペンベルクにその完成を知らせてやった手紙にははなはだ人の心を打つものがあるが、その一節に曰<sup>いわ</sup>く、「……私は冷たい月光の中に出て行きました。そして小さなミューゾオを大きな獣のように愛撫してやりました……かかるものを私に授けてくれた、その古い壁を。それからまたあの破壊されたドウイノをも。」（ドウイノは大戦中に

伊太利軍のために破壊された。）

それから数日と立たない裡うちに引続いてまた、その支流とも云うべき小さな作品がほとんど求めずして出来た。

「オルフォイスに捧ぐるソネット」と呼ばれる五十余篇のソネットがそれである。

それまでもとかく健康のすぐれなかつたリルケは、その仕事の過労のためにいよいよ健康を損ねてゆき、その後ほとんどそのミュゾオにいついたまま、僅な詩作と、二三の翻訳をしたくらいで、遂に一九二六年十二月の末に死んで行った。死んだのは、しかし、その愛するミュ

ゾオではなく、発病後強いて移されたレマン湖畔こはんのモントルウの療養所である。

病名は壊血症というものだそうだが、その病気の直接の原因になったと云われる、いかにもリルケの最後らしい、美しい挿話を、私はつい最近読んだ。

\*

ある日、リルケはミュゾオを訪れることをあらかじ予め約束してあった一人の婦人を待っていた。その婦人は約束の



時間よりもやや遅れてやって来たが、それを待っている間、リルケはその客に与えようとして、庭に出て薔薇ばらを摘んだ。(ミュゾオの庭には、詩人が自分の手で百株ばかりの薔薇を植えていたのである。)その時その薔薇の棘とげが彼の手を傷つけた。そしてその何でもなかったような小さな傷が次第に悪化して行って、遂に壊血症の原因になったと云うのである。「つねに女性の偉大さと薔薇の美しさを説いていた詩人はかくして一女性のために摘んだ薔薇の一つに刺されて死んで行ったのである。その最後がいかに痛ましくあったとは云え、それはリルケが

かれ独自の死を死すべく選んだものであった」とその話の筆者は云う。

そのミュゾオの館の庭には、いまでも詩人の手植の薔薇が咲いているそうである。私が高日スウイスにも行けるような身の上になれたら、何よりも先に、そのミュゾオの館と、それから詩人の墓のあるラロンの村とを訪れることだろう。

が、それはいつのことやら……。私はそれよりか今は、本はとつくに買い込んで置きながら、まだ手をつけていない、そしてリルケ自身も「長い、時としては骨の折れ

る読書」と云うその「ドウイノ悲歌」を何とかして克服せんことをこそ思うべきであろう。

## ノオト

「雉子日記」のなかで、私はしばしばミュゾオの館やかたのことを持ち出したが、それについて富士川英郎君から非常に興味のあるお手紙を頂戴した。「ミュゾオの館」というのは、御承知のようにリルケがその晩年を過した瑞西スウイスのヴァレエ州にある古い *château* のことである。そ

の見もしない *château* のことなんぞを私はいろいろと知ったか振りをして書いて見たのであるが、富士川君の注意によって、二三ここに訂正して置きたいと思うのである。

先ず、その *château du Muzot* の読み方である。私はそれを普通にシャトオ・ド・ミュゾオと発音していた。ところが富士川君の注意によると、リルケみずからが一九二一年七月二十五日にマリイ・フォン・トゥルン・ウント・タクジス・ホオエンロオエ夫人に宛てた手紙のなか  
にそれを *Muzotte* と発音してくれと書いてあるのだそう

である。おそらくそれがその地方特有の呼び方なのであろう。もちろん、Muzotte は富士川君も言われるように、仏蘭西式にミュゾットと発音するのだろう。従って私の用いていた「ミュゾオの館」は「ミュゾットの館」と訂正されなければならぬ。

以上はその館やかたのほんの名称のことだが、富士川君はその名称のことから更に、その前述の手紙の中でリルケがいろいろとその館の構造や由来について詳しく語っている由、まだその手紙を見ていない私に懇切に書いてきてくれたのである。——それによって私はもう一つ訂正

して置いた方がいいと思う箇所を発見したが、私はその詩人の愛していた古い館をただ漠然と十三世紀頃のものと書いていたが、その頃から残っているのはその建物の根幹だけで、それから何度も建て直され、現存している天井や家具の多くは十七世紀頃のものらしい。それからリルケがその館のさまざまな歴史を書いているうちに、こんな話があるそうである。

十六世紀の初め頃に、その館に *Isabelle de Chevron* という娘が住まっていた。その娘は *Jean de Monthneys* という男と結婚した。が、それから一年立つか立たぬうち

に、マリニヤンの戦いが起り、その夫はそれに果敢なく戦死してしまった。若い寡婦かふになったイザベルは再びミユヅツトの館に引き取られた。やがてそのうちに彼女の前に二人の求婚者が現われた。そしてその二人は決闘して、お互いに刺し合って二人とも死んでしまった。その夫の戦死には耐えることの出来たイザベルも、それには耐え得ずして遂に発狂してしまったのであった。そして夜ごとにミイエジュにある二人の求婚者の墓まで、薄い衣をまとったまま彼女はさまよって行くのだった。そしてある冬の夜、彼女はその墓場に息絶えていた……

リルケは死ぬとき遺言して、そのイザベル・ド・シュヴロンの眠りを妨げてはいけなから、ミュゾツトの近くのその墓地には自分を葬らないようにして貰いたいと言ったといわれる。……リルケの墓のあるラロンが、もうほとんどシンプロンにも近いくらい、ずっとロオヌの谷を<sup>さかのぼ</sup>ったところにあることは、私が前にも書いたとおりである。その墓の写真が、去年の「インゼルシツフ」のクリスマス号に載っていたそうだが、それもまだ私は見る機会を得ていないのである。







日本文学電子図書館

---

「堀辰雄 日本の文学42」

著 者：堀 辰雄

制作者：宮澤一郎

出版社：中央公論社

昭和39年9月5日発行

---



日本文学電子図書館